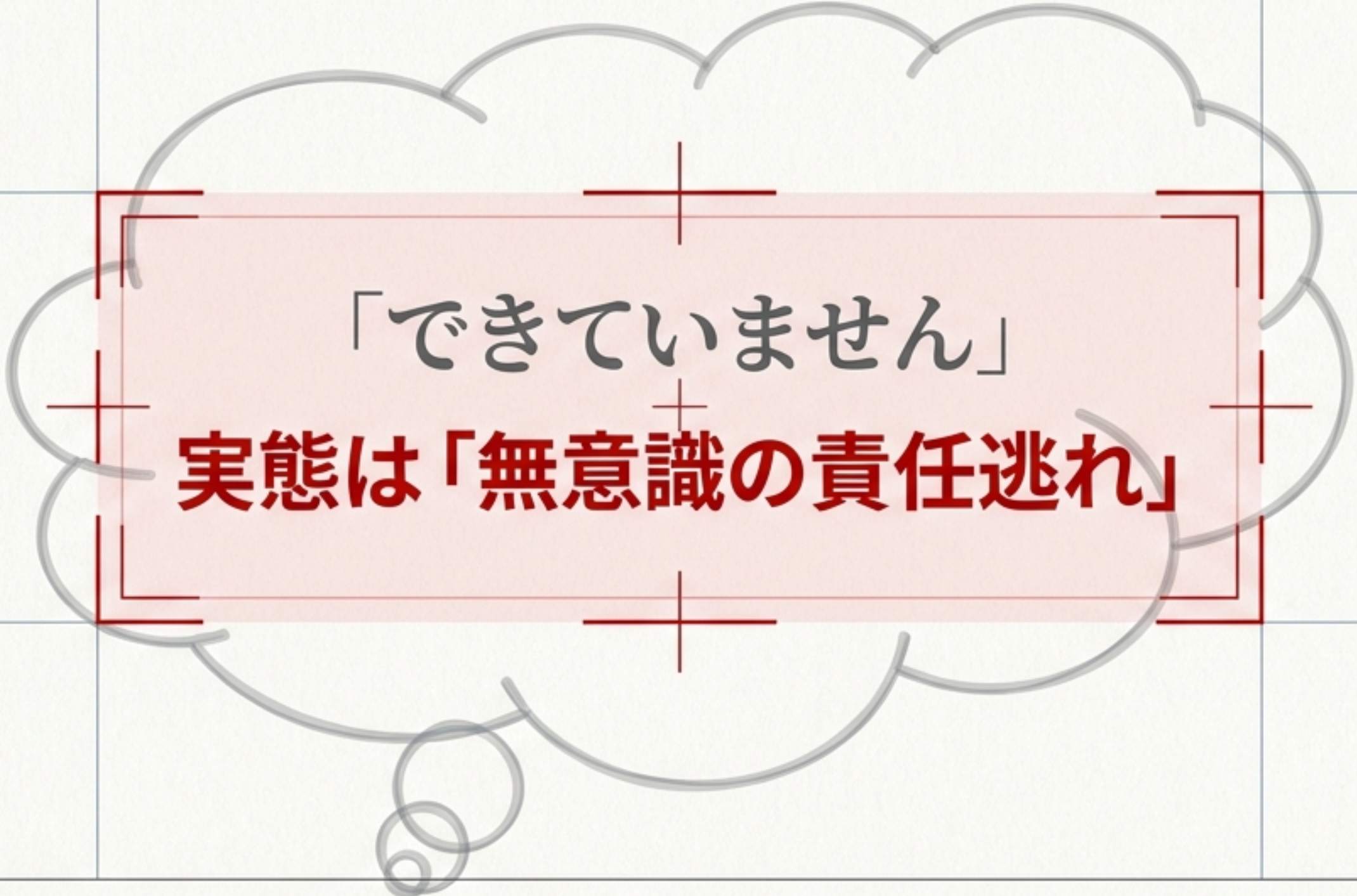


やっではないことを 「できてない」と誤魔化すな

現実の提出から始まる、成長と信頼の法則



「できていません」
+
実態は「無意識の責任逃れ」

一見すると反省しているように聞こえるこの言葉。
しかし、この言葉に隠された責任逃れに気づかなければ、成長はそこで完全にストップする。

「できていない」

前提 挑戦した

状態 基準に届いていない

本質 失敗の報告

「やっていない」

前提 手をつけていない

状態 行動してない

本質 失敗っぽく見せた偽装

「やっていません」と言うと…

「できていません」と言えば…

行動責任が
ダイレクトに
問われる。

⚠️ 痛い、恥ずかしい。

無意識に「やっていない」を
「できていない」に言い換え、
責任の位置をズラしている。

能力不足に
聞こえ、
同情される。

**Q: 自宅でシャトルキッチ
の練習をした？**

⇒ **「できていません」**

Q: 自宅でイメトレした？

**違う。多くの場合、
ただ「やっていない」だけだ。**

**Q: ソモサンセツパへ
アウトプットした？**

⇒ **「できていません」**

行動を起こしたか？

YES

結果が出たか？

NO

NO

「やっていない」

「できていない」

「できていない」は、行動した人間だけに許される言葉である。

本人の実態：
そもそもやっていない

議論そのものが腐る
「事実認識のズレ」

優しい指導者：
技術論の指導

やっていない人に対して、「どうすればできるようになるか？」と議論しても、完全な的外れ。良い改善案も空中に投げられるだけ。

**事実が
「できていない」なら**

**目のやり場、フォーム、
思考過程、方法の修正。**

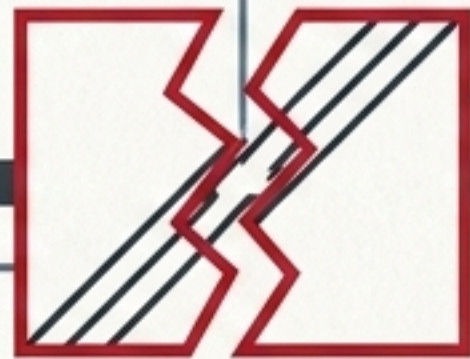
技術論

**事実が
「やっていない」なら**

**なぜやらなかったのか？
なぜやらない自分を放置したのか？**

**マインドセット
の議論**

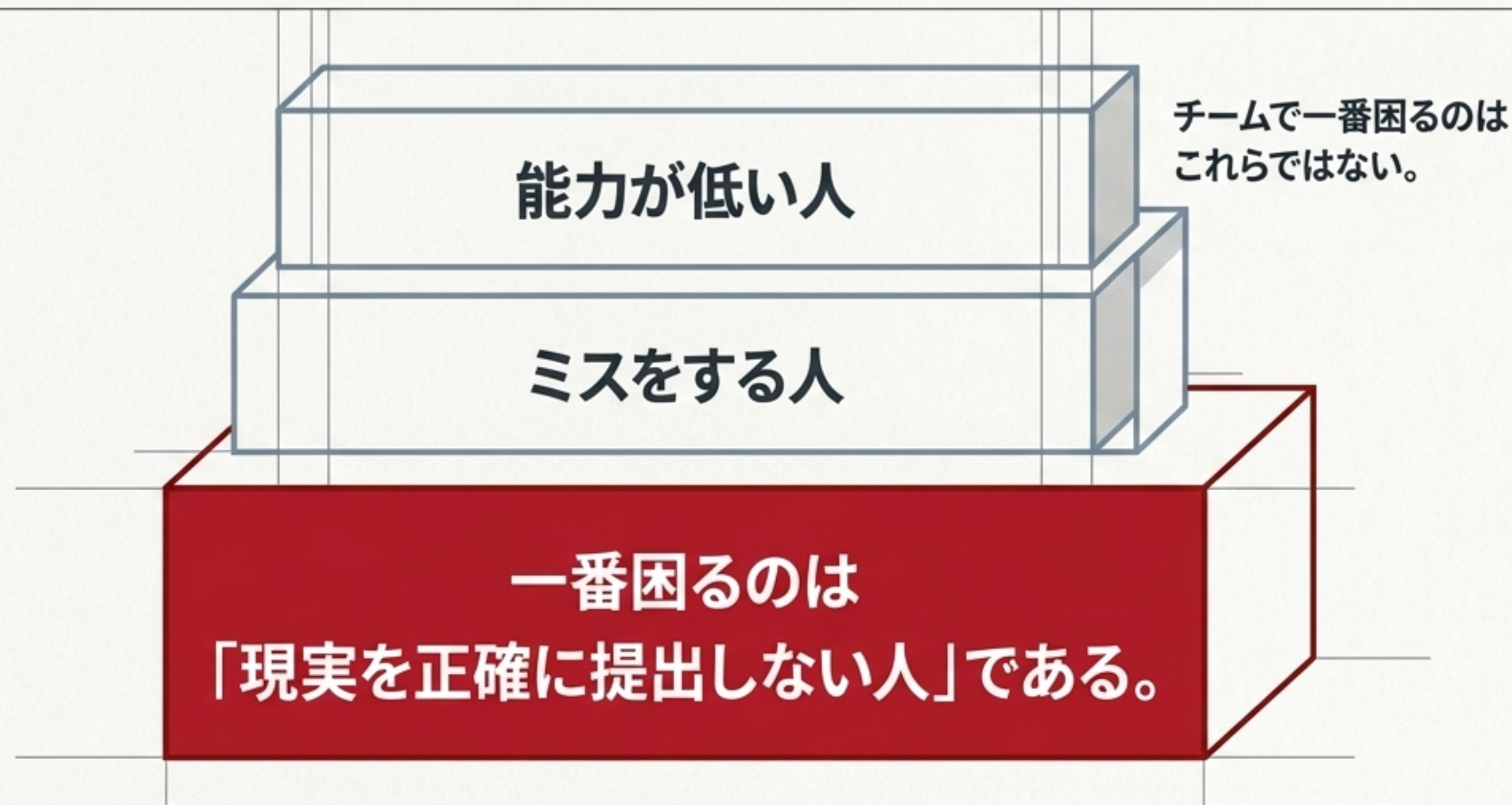
ごまかしによる 「確認コスト」



毎回「本当にやったのか？それともやっていないだけなのか？」という確認が発生する。

指導、助言、時間、設計がズれる。その時点で信頼は大きく削られる。

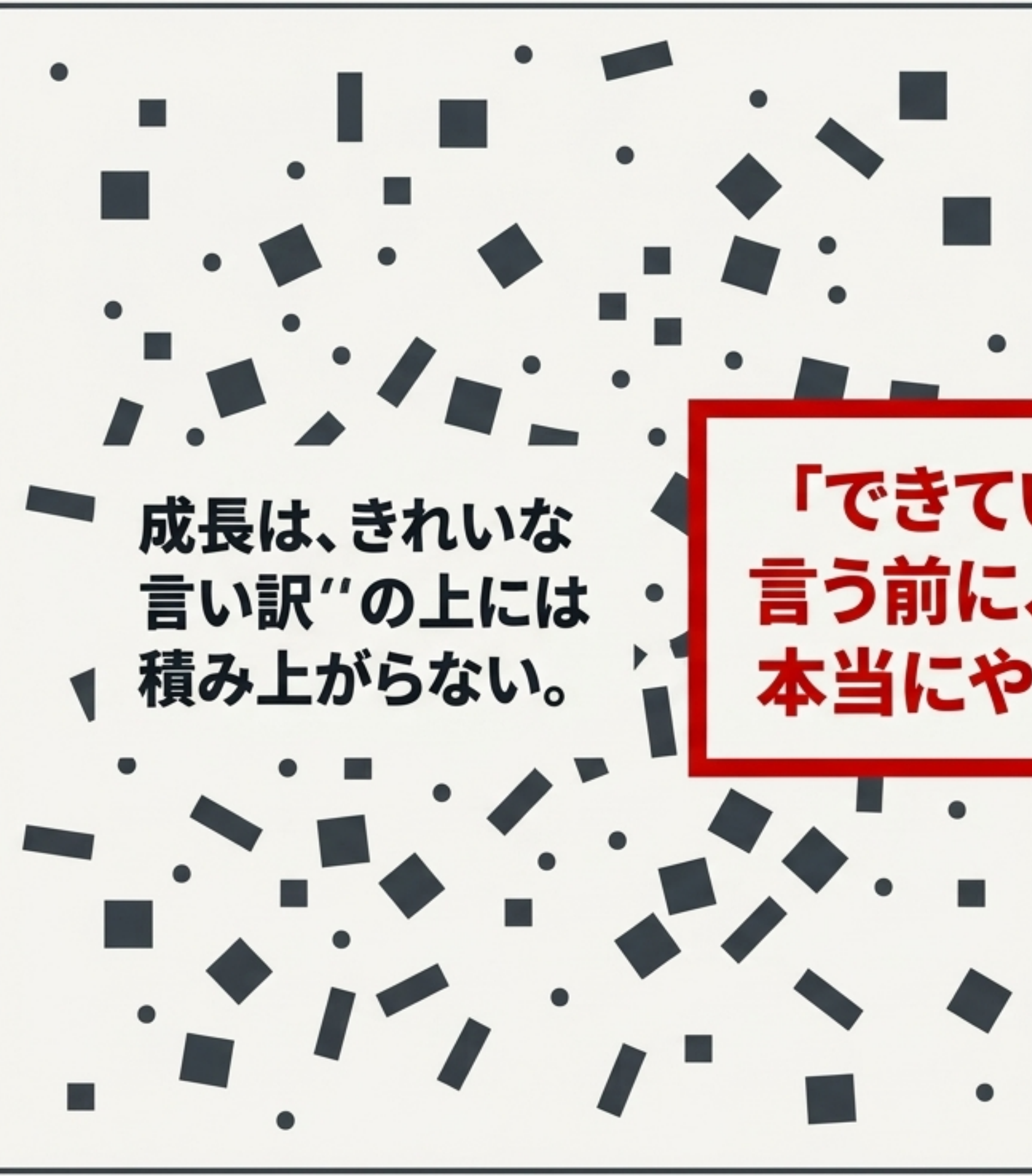
信頼の条件は、結果ではなく「正確な現実提出」



未熟でもいい。失敗してもいい。しかし、現実だけは正しく出さなければ、次に進めない。

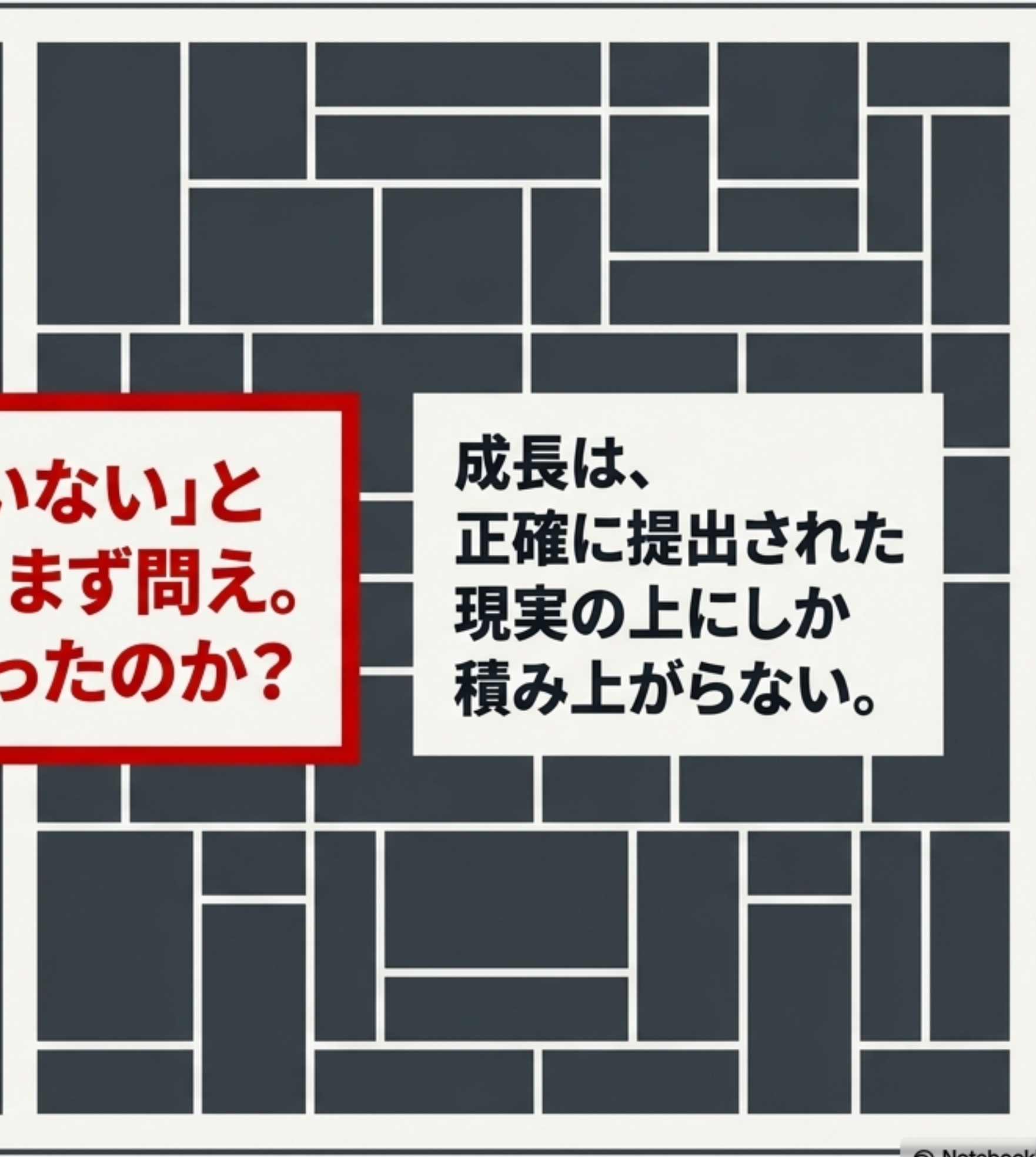
「やっていません」
「手をつけていません」
「だから、できているかどうかを
語れる段階にありません」

これは恥ずかしい言葉だ。自分の甘さが見える言葉だ。しかし、この言葉を出せる人は、まだ信頼できる。



成長は、きれいな
言い訳”の上には
積み上がらない。

**「できていない」と
言う前に、まず問え。
本当にやったのか？**



成長は、
正確に提出された
現実の上にはしか
積み上がらない。